
月影のDOLL

徳次郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月影のDOLL

【Nコード】

N0312F

【作者名】

徳次郎

【あらすじ】

将也は小学四年生まで住んでいた地に15年振りで降り立った。出張の為に住み出したアパートで、彼は度々見る悪夢に悩まされていた。そんなある日きれいな黒髪の少女と知り合うが、彼女は将也に対してやけに積極的だった。しかし、ふとした事で将也は疑問を抱く。彼女の着ている制服はいつたい何処の高校のものか？この町で同じ制服を全く見かけないのだ。そして将也は夢の中の少女が誰かに似ている事に気付く。

1ノ夜【開拓地】（前書き）

この作品は『うつつ』というタイトルで執筆したものを加筆修正したものです。

コテコテホラーではなく、どちらかと言えばロマンスホラーなので、通常作品の延長でお読みいただけると幸いです。

1ノ夜【開拓地】

「あたしを捨てたわね」

「知らない、俺は知らない」

「あたしの事、覚えてもいないの？」

「キミなんて知るもんか。それに、俺は女性をふった事かんが無い」
「覚えていないのね……」

黒光りする長い髪が風ではたいて、無数の毛先が生き物のように宙を舞う。

真っ白な顔はピントがボケているかのように輪郭がぼやけて、目の形はよくわからない。

ただ、言葉を発する唇が確かに動いているのは判った。

「でも、きつとまた逢えると思っていたわ。それなのに、あなたは覚えていないなんて……」

「覚えているも何も、俺は忘れるほど多くの女性とは付き合っていない」
「あたしを捨てたくせに……」

「きつと人違いだ。キミは人違いをしているんだ」

女性の顔をよく見ようとしても、白い肌以外は臍気でもうしても細部を確認する事は出来なかった。

「自分のした事を忘れたくせに……」

「キミは誰なんだ。いったい俺が何時キミを捨てたと言っただ？」

「思い出して。自分で思い出しなさい」

長い黒髪は大きくうねる様に伸びて、彼の顔に纏わり着いた。その何本かが首に巻きついて強く締め上げる。

顔は口も鼻も覆われて呼吸が出来ない。

もがこうにも身体が自由に動かない。

自分の身体が自分のもので無いかのように運動神経が上手く伝達されない。

息苦しさの限界に達して、渾身の力を振り絞った。

「うおおお……」

なかむすいままなや

中村将也は布団を跳ね除けるようにして、ベッドの上で飛び上がる勢いで上体を起こした。

大胸筋の中央には玉の汗が浮かんでいた。

カーテンをすり抜けた月明かりが微かに部屋の中を照らし出して、DVDデッキの小さなデジタル時計の表示がやけに鮮明に輝いている。

彼はここへ越してきて以来、幾度と無く同じ夢にうなされていた。見覚えの無い女性、いやまだあどけない少女にも見える女が、自分を捨てたと攻め立てる。

将也は毎回同じ応えをする以外にない。

自分には全く見に覚えが無いのだから。

いや、見覚えが無いも何も、目鼻立ちがどうにも臍気ではつきりしない為、その女性を認識する事が出来ない。

それでも、自分から女性を振った事が無いのは本当だった。だから、彼女がどんな顔をしていようと、将也は堂々と否定できる。

彼は大手建設会社で屋内配線工事の部署にいる。新しく都市開発される事になった小さな地方都市に長期出張で来ていた。

環境の変化が、いや今まではこんな事は無かったのだが……今回に限ってそれが原因なのだった。

ある地方都市……ここは将也が小学校の四年生頃まで住んでいた土地だ。

その頃は雑木林がいたる所に存在し、小さな堀にはメダカやザリガニがうじゃうじゃいた。

しかし、新たに都市開発が進められる故郷は、埋め立て尽くされた田畑に伐採された林、昔の記憶を辿ってもその面影は無かった。

区画整理も行われて、将也の記憶にある住所は無くなっていた。新しく表記された地名や番地はまったく判らない。

ただ、通っていた小学校は数年前に建て替えられたものの、昔と同じ場所に在った。

といっても、変わり果てた周囲の景色にその位置関係がうまく思い出せなかった。

将也の一家はここを後にして茨城に移り住んだ。その後彼は千葉の大学で電気工学などを学んで今の会社へ就職した。

将也の会社が用意した住まいは普通のアパートだった。

白い外壁で覆われた木造モルタルの二階建。各部屋には小さなベランダも設置されている。

十二室ある内、二階部分の六部屋を全て会社で借り切っている。

すなわち、同じ階に住む住人はみんな会社の同僚だった。

もちろんそれだけでは足りないの、あちらこちらのアパートに会社名義で契約した部屋が在る。

同社からこの街に来た社員は全部で二十名。他は派遣会社からの人材で頭数を揃えている。

朝六時に起床して、七時には現場へ向う。

車で十五分ほどの場所に大きなショッピングモールを建設中で、その屋内配線全てが将也たちの受け持ちだ。

作業開始は八時からだが、下準備もある為に余裕を持って家を出る。同僚は皆二十代で同じ世代だった。

上司である工事主任、つまり管理職者は他の役職連中と一緒に別のアパートに住宅を借りている。

もちろん、ワンランク上の住まいだが、ほとんどは妻子持ちでありながら単身で出張している為、それくらいは多めに見てあげないとかわいそうでもある。

朝早い変わりに終業時間も早い。

通常は五時、遅くとも六時には終わる。ただ、それは今だけの話で、建物の完成が近づけば仕事は押しに押されて毎日夜の十時過ぎまで残業続きとなるのが当たり前だ。

ちゃんと予定表に沿って作業しているにも関わらず、何故か毎回最後は突貫工事になってしまっから不思議だ。

「しかし、こんな所にこんなでかいモールなんか作って客集まるのかね」

工事現場に仮設されたプレハブ小屋の仮設事務所の隅で、陽差を浴びながら昼食をとっていた同僚の佐々木信二が広大な埋立地を眺めて言った。

「隣やそのまた隣の町も商圈に入っているらしいよ」

一緒に昼食をとっていた将也が同じく埋立地を見渡す。

ショッピングモールの敷地だけでも異常な広さを占めているが、その周辺にもこれから出店する大型店舗の建物が建設中で、あちらこちらに鉄骨が立ち並ぶ。

そして埋立地はさらに遠くまで伸びている。

近年増えだした地方型の高速道路も建設中で、埋立地の上に幾つもの基礎土台が造られている。

「お前、ここの出身なんだって？」

信二が言った。

「出身って言っても、小学四年の時に引っ越したから」

「じゃあ、ずいぶん変わったろ」

「もう何処がどこだかわかんないよ」

記憶にある田畑の大半はさら地に変わり、釣りをした堀もコンクリートで固められた水路に変わっていた。

その水路が昔の堀だったのかどうかもあるは定かでない。

初夏の熱い陽光が降り注いでいた。

外壁をまとい始めたモールの建造物は要塞のように聳え建ち、大型クレーンのアームが青い虚空に向って伸びている。

将也はコンビ二弁当のから揚げを口に運びながら、その先を眩し

そつに見上げた。

2ノ夜【うしろ姿】

将也の同僚である佐々木信二は早々に帰宅したアパートの階段を上っていた。上りきった通路に何かが落ちている。いや置いてあるのか？

信二は腰を屈めてそれを見ると、首を傾げた。

「何だ、これ？」

そこには肌の白い黒髪の人形が在った。

足の関節を折り曲げて地べたに足を伸ばして座るような形で置いてある。

「将也のか？ まさかな」

信二は思わず呟いた言葉を自分で否定した。

おそらく下の住人に小さな子供でもいて、この通路も遊び場になっているのかも知れないと思った。それとも近隣に住む子供か。

信二はそれには手を触れず、その先にある自分の部屋のドアを開けた。

その日将也は図面の整理をした後、定時を少し過ぎた五時四十分頃に仕事場を後にした。

大半は仕事を終えて帰った後だが、プレハブで出来た仮設事務所では、まだ仕事をしている連中もいる。

6月も末になりだいぶ陽が長くなった為、外はまだ充分に明るかった。

「お疲れ様です」

予定表のチェックをする主任に挨拶をして、将也はプレハブ小屋を出た。

真新しい大通りから古い国道に出る。

昔自転車で走った記憶のある唯一の道だ。そして再び真新しい通

りへ入ると住宅地が広がる。

道路を挟んだ反対側はまだ土地が分譲中で、小奇麗な一軒家が歯抜けに建っているものの、まだまだ空き地が多い。

通り沿いにはコンビニや、建設中の中規模店舗が目につく。道なりに走って二つ目の信号を右折すると、少し古い住宅街に入る。

少し古いといっても、将也が住んでいた時とは全く違った風景だ。昔は住宅街の風景そのものが何処か灰色に古ぼけていたが、いまは全体が白っぽい。

小学校の方角からして将也が以前住んでいた周辺らしい事がかるうじでわかるが、懐かしむような場所はやっぱり残ってはいない。

その住宅街の中に会社で借りているアパートがある。

家具付きのアパートはテレビも冷蔵庫も衛星放送も、そしてパソコン用の光回線も揃っている。

自分で持ってきて来たのは着替えと自分のノートパソコンくらいだった。

彼は浦安にある会社の寮に本住まいがある。

寮といってもマンション形態の住み心地はすこぶる快適で、ほとんどの社員は結婚するまでそこに住んでいる。

出張の多い仕事なので、自前で家賃を払って部屋を借りていると、なんだか損している気分になるのも要因の一つだ。

住宅手当もあり、実費が少ないのも魅力だろう。

もちろん光熱費等は個人もちだが、それでも浦安駅近くに一万円で1DKは格安だ。

長期出張の場合に限り、自分の車を持ち込む事も出来る。地方都市は足が無いと私生活に困るからだ。

現に、今いるこの町も駅前には寂れきって、大通り沿いに立ち並ぶ郊外型店舗での買い物は車が無いとかなり不便だ。

アパートと路地を挟む形で月極の駐車場がり、各々の車はそこに停めているが、もちろん駐車場代は会社からは出ないので自分達で

支払っている。

夕飯の弁当を買ってアパートに戻った時には、だいぶ陽が傾いて
ほの暗さが増していた。

駐車場に車を停めると、将也はアパートへ向って通りへ出る。

駐車場は緑の低いフェンスで囲われているだけで視界を妨げるも
のは無い。

歩きながら何となく周囲を見ていれば、道路を渡る際にいちいち
安全確認をする必要なんて無かった。

それなのに彼は、車道に足を踏み出した直後に突然左から何か
迫るのを感じて身構えた。

しかし時遅く、その何かは将也の身体にぶつかった。

微かな視界の隅に、黒い影だけが一瞬見えた。

「きゃっ」

「痛っ」

ガシャンと音がして何かが倒れる。

一瞬閉じた目を将也が開けると、高校生くらいの少女が自転車と
共に地べたに転がっていた。

制服のスカートがまくれて、街路灯に白い脚がさらされている。

「大丈夫か？」

彼は慌てて少女に手を差し伸べる。

「す、すみません」

少女はそう言いながら起き上がって紺色のスカートをほろった。

将也は自転車を引き起こして

「いや、俺もよく周りを見ていなかったんだ」

少女は屈んで籠から落ちた鞆を拾いながら、乱れた黒髪を後ろに
かき上げる。

「いいえ、あたしの方こそ全然前見てなくて」

夕暮れの淡い陽差に照らされた白い肌は瑞々しくきめ細かで、燈
つたばかりの水銀灯の明かりさえ反射している。

艶のある黒い髪が肩を通り越して背中に掛かっていた。

立ち上がった少女は鞆を自転車の籠に押し込むと

「このアパートに住んでる人ですか？」

駐車場の向かいを視線で示した。

「あ、ああ」

少女は小さく笑みを浮かべると

「あたし、玲美^{れみ}っていいいます」

「この辺に住んでるの？」

「はい」

頭を動かすたびに揺れる黒髪は、夕闇に輝いていた。

地元の高校生か……しかし、将也は玲美を何処かで見たような気がする。

何故か初めて会った気がしなかったのだ。

……きつと、この通りで以前見かけたのかもしれない。

「何時もここを通るの？」

「ええ」

玲美はそう言うつと自転車に乗ってペダルを踏み出した。

「それじゃあ」

黒髪をサラサラとなびかせながら、彼女はすぐ先の角を曲がつて姿を消した。

その夜、将也はあの夢を見なかった。

久しぶりに朝までぐっすり眠る事が出来た。

そう毎日見るわけではないが、どうにも後味の悪いあの悪夢は、夜中に目が覚めるとなかなか寝付けなくなり、朝の寝覚めもよくないのだ。

翌朝将也がアパートを出ると、そこには昨日出会った少女、玲美^{れみ}がいた。

「おはようございます」

「ああ、おはよう」

将也はそれがただの偶然だと思い「これから学校？」

少々意識して気さくに返す。

「ええ」

玲美はそう言って笑うと、自転車の籠から四角い包みを取り出した。

紺色のバンダナに包まれた四角いものが何なのか、将也にも何となく判った。

「えっ？」

しかし、どういう事なのかは判らない。

「お弁当です。何時もコンビ二とかでしょ」

やはり四角い包みは弁当だった。そして自分に差し出したのだと確信した。

「でも、何で？」

「いいじゃない。小娘の作ったお弁当じゃ嫌ですか？」

玲美はにこやかな表情を途端に曇らせた。

朝の陽差は、昨日見た以上に彼女の肌を白く映し出している。

「いや……そんなこと無いけど」

「じゃあ、持って行ってください」

彼女は手にした包みを将也に向ってさらに差し出す。

陽の光を乱反射した真っ白なブラウスは、薄っすらと水色の下着が透けている。

将也は慌てて彼女の胸元から手元の弁当へ視線を僅かにずらした。玲美は目を細めると、閉じたままの口角を持ち上げるように笑った。

彼もそれを受け取らないわけには行かない雰囲気だったので、思わず包みに手を出す。

「じゃあ、あたし行きますね」

玲美は将也が弁当を受け取ったことに安心したのか

「毒なんて盛ってませんから安心して」

そんな冗談を言いながら、自転車に乗って走り去った。

将也は、風にはためく玲美の長い黒髪の後姿を少しの間見つめていた。

3ノ夜【唐突】

「お前、それ今朝貰ったやつだろ」

昼休み、信二が声をかけてきた。

佐々木信二は歳も同じで入社もほぼ同期だった。

ほぼと言うのは、将也は大学を出て四月に入社したが、信二はその年の九月に中途で入社してきたのだ。

現場が同じ事も多く、社の中でも一番気が合うかもしれない。

黒髪を刈り上げたスタイルのサッパリとした将也に対して、少し長めのブラウンに染めた髪を何時もはためかせる信二は明らかに対照的だ。

対照的なのは性格もそうで、将也は比較的消極的かつ慎重に物事を見定めるが、信二は大胆に、そして楽観的に見る癖があった。

「なんだよ、あの女子高生は」

信二が面白そうに訊いてくる。

おそらく今朝の光景を、自室の窓からでも見ていたのだろう。彼は将也の隣の部屋に住んでいる。

「俺にもよくわかんないんだ」

「はあ？ わかんない娘に弁当貰ったのか？」

「いや、昨日駐車場の前でぶつかっただんだよ」

「へえ、そりやドラマチックだね。じゃあ、彼女がお前に一目惚れか？」

信二はコンビ二弁当を箸で突きながら笑った。

「でも……」

将也は少し浮かない笑みを浮かべて、手作りのダシ巻き卵を一切れ口に入れると

「彼女、何時もコンビ二弁当ばかりじゃ……て言っただよ」

「なんだよ、その通りだろ」

「でも、何時もって、どうして判るんだよ」

将也の怪訝そうな視線を受けた信二も、口に運んだ箸が一瞬止まった。

「それは……こういう場所で働いてればそんなもんだろっな。て思ったんじゃないの？」

「ここで働いてるって、どうして判るんだよ」

「この近くを通りかかったのかも」

「ああ……そうかもな」

将也はそう言いながら、やけに旨い鳥の照り焼きを味わっていた。信二は昨日アパートの通路に人形が置いてあった事を将也には言わなかった。と言うより、もう忘れていた。

今朝出勤する時にはそれは無くなっていて、もともとさして気に留めていなかった信二の記憶からも、人形の事は消えていた。

大きなショッピングモールの中は、特定の場所以外窓は無い為、昼休憩の時は外へ出る事が多い。屋内作業の場合、外の陽差を受ける事が気分転換になるのだ。

夕方になって終業の時間が来たが、将也はなかなか自分の持ち場が一段落しなかった。

一緒に作業していた後輩が図面を見間違えて、コンセントの設置場所を誤った為、その修正を行っていた。

将也や信二は入社三年目に入り、小さな班を仕切る立場にあった。その下にはもちろん同年代もいるが、入社一年目、二年目や派遣の連中も多い。

「よし、ここで終わりだな」

将也はコンセントの台座を取り着けて言った。

「すみません」

「いや、いいさ。俺も何度か間違った事がある」

将也はそう言って及川辰彦の肩を叩くと

「俺たちも帰ろうぜ」

内装工事が進む建物の中は、あちこちが張りぼてのようにまだらにパネルが嵌め込まれ、鉄骨やコンクリート、それに防火シートな

どがここそこで剥きだしになっている。

作業用エレベーター周囲は最初に完成させてあるので、その部分だけが別空間のようにぼっかりと周囲の景色から浮いている。

完成期日にまだ間があるので、今のところは定時を過ぎると大半の現場の連中は帰ってゆく為、既に照明もほとんど落とされていた。帰ると言っても、派遣会社関連や外装工事の連中は同じ敷地に立てられたプレハブの簡易宿舎に寝泊りしている為、周辺にひと気がない。なくなることはない。

一階まで降りた将也と及川は、常夜灯の明かりを頼りに出口へ向った。

従業員通用口手前には警備室が既に完成しており、警備員が配置されているので、二人は軽く挨拶をして外へ出た。

事務所に戻った将也はその日の業務日誌を着けて、帰り支度を始める。

七時を過ぎていた為、日の長くなったこの時期でも外は暗がりには包まれていた。

敷地内にはあちこちに簡易的な街路灯が設置されて、それが僅かな明かりを作っている。

将也がバックを手にした時、窓の外に人影が見えた。

まだうろつく人影があってもおかしくない時間帯だ。残業する者もいるし、周囲の簡易宿舎から外出する者もいる。

しかし、将也が事務所の戸を開けると、そこには玲美^{れみ}が立っていた。

「わっ、ビックリした……」

将也が思わず身体を硬直させる。

「ご、ごめんなさい」

「いや、いいけど。どうしたの？」

「まだ仕事してるのかなって思って」

玲美は少し俯いて言った。

「今、帰るところだけだ」

将也はそう言って笑うと「ここ、よく判ったね」

「うん、何となく当てずっぽう」

彼女はそう言って、小さな肩をすくめて笑った。

その仕草が何とも可愛らしくて、将也は思わず頬を紅潮させた。

二十五歳になった彼が、女子高生と触れ合う機会なんて普通なら無い事だ。

確かに大学時代はその年代もターゲットに入っていたし、合コンなどもしたが、就職してからは同じ社会人かせいぜい女子大生しか付き合いは無かった。

昨日も、そして今朝も感じた事だが、女子高生はこんなに初々しかったか？ もちろんここが地方だからなのかも知れないが、最近の高校生もまんざらではないな……。

そんな事を将也は思っていた。

「あつ、弁当美味かったよ」

将也はそう言って、空の弁当箱を玲美に差し出した。

「よかった。喜んでくれて」

彼女はそう言って弁当箱を受け取ると

「明日も作っていい？」

「えっ？」

将也は、会って間もない彼女がどうして自分にそんな好意を抱くのか判らなかった。と言うより、不思議だった。

自分は……確かに酷くはないが、一目惚れされるほどの容姿ではないし、こんな女子高生なら周囲にいくらでも同世代のカッコイイ男がいるのではないだろうか。

「いいけど……」

将也にはそれを断る理由が見つからなかった。

一緒に敷地を歩いて将也の車の所まで来た時、ふと彼は気がついた。

「あれ、キミ何できたの？」

「歩いて」

彼女は平然と言った。

「歩いて？」

玲美は将也のアパートの近くに住んでいると言っていた。それをここまで歩いてきたのか？ それとも学校帰りの途中か？

いや、学校帰りなら自転車のはずだ。今朝彼女は自転車で学校へ向ったのだから。

将也は何だかよく判らない事ばかりで逆に、彼女にいちいち質問するのを止めた。

「じゃあ、乗っていく？」

「うん」

玲美は笑顔で嬉しそうに頷いた。

4ノ夜【夕食】

「実は今日、両親がいなくて……」

大通りから国道へ出た所で玲美が言った。

「ひとり。て事？」

将也は訊いた。

「ええ。何だか心細くて」

「兄妹はいないの？」

「あたし、一人です」

玲美は窓の外を見つめたまま言った。

ぼつぼつと街路灯の明かりが通り過ぎてゆく。

大通りは街路灯も連立しているが、旧道にも思える国道は淋しい光が時折見える程度だった。

将也は運転する視線を、チラリと彼女へ向ける。

小さな街灯の光に微かに映る彼女の寂しげな瞳が気になった。

「一緒に飯でも食べる？」

「いいんですか？」

その言葉を待っていたかのように素早い返事が返った。

ほの暗い車内でも、彼女の笑顔は感じ取れた。

「えっ、あ、ああ。キミさえよければ」

将也は少し戸惑いながら笑みを返す。

「じゃあ、あたし何か作るわ」

「えっ？」

思いもかけない言葉だった。

今時の高校生が、一昔前のドラマか漫画のような事を言うとは思わなかったからだ。

普通なら、『じゃあ中華がいい』とか、『ファミレスでいい』とか、そんな答が普通だろう。

「いや、そんな面倒な事」

「あたし料理好きだから、平気」

その言葉を聞いて、将也はあの弁当の美味さを思い出した。

「じゃあそうしてもらうか」

将也はしばらく国道を走った所で、何時も入る通りとは逆向きにハンドルを切った。

二人は遅くまで開いているスーパーへ買出しに寄った。鍋もフライパンも無い為、それらも一緒に買う。

買うものは玲美に全て任せて、将也は買い物カゴを乗せたカートを押しているだけだった。

野菜や肉を選ぶ彼女の横顔は何だかとても嬉しそうだった。そしてそれは、女子高生を越えた一人の女の横顔でもあった。

その玲美のシルエットを見て、彼は何故か懐かしい思いに駆られた。それが何故なのかは判らない。

彼女が自分好みの容姿だからなのか……その程度にしか認識しなかった。

将也の住むアパートは別に女性禁制などの決まりは無かったが、同じ階は皆同僚だ。

彼の部屋は206号室で角部屋だが、もちろん隣にも同僚がいるわけで、女性を、しかも制服姿の高校生を連れ込む所など見られるわけにはいかない。

そう思うと、自然に階段を上げる足音は忍ぶようになる。

幸いアパートの階段は左右に設置してある為、近いほうを上れば直ぐに部屋がある。

将也はそつと部屋の鍵を開けると、静かにドアを開けて玲美を招き入れる。そして、音を立てないようにドアを閉めた。

何時もの癖で直ぐに鍵を閉めようとしたが、何だか如何わしい事を目論んでいるように思われるのが嫌で、将也は鍵を閉めずに玄関を上った。

「鍵締めないの？」

先に靴を脱いでいた玲美が声をかける。
さすがにすっかり者のようだ。

「えっ、ああ。今締めるよ」

彼は靴を脱いでから、上体を伸ばしてドアロックの摘みに手を伸ばした。

部屋に入る将也を横目に、玲美は台所で買って来た食材や鍋を出し始める。

四畳半ほどのキッチンには小さな冷蔵庫と電子レンジ、そして洗濯機がある。

流しもコンパクトで電気コンロが二つとシンク。その間に少しだけ、三十センチほどの調理スペースが在る。

テーブルが無いので、冷蔵庫に入れるものはそのまま入れ、床に置いて大丈夫な物は足元に並べていた。

彼女は何だかやけに慣れた手つきで鼻歌混じりに身体を動かしていた。

「何か飲む？」

途中で玲美が将也に声をかけた。

「あ、ああ。お茶あったよね」

玲美はグラスとペットボトルのウーロン茶を部屋へ運んでテーブルに置いた。

「何にもないのね」

初めてリビング兼寝室を見た彼女が、辺りを見回して言った。

右側の出窓の脇に備え付けのベッド、その反対側には同じく備え付けのテレビ台と液晶テレビ。

テレビ台の中には衛星チューナーとDVDデッキが収まっていた。そして部屋の中央にローテーブル。ざっと見えるのはこれだけだった。

もちろん、クローゼットの中には着替えやその他の荷物が押し込んであるが。

「長期と言っても出張だからね」

「ふうん。そうかあ」

彼女は、ある意味そっけない口調で応えると再びキッチンへ戻った。

将也はそれを目で追った。

まるで、夢の中の風景でも見ているようだった。

時折うなされる悪夢の変わりに、現実でいい夢を見させてくれているんだろう……。

制服姿で台所に立つ女性の後姿を眺めながら、将也はタバコに火をつけた。

5ノ夜【密着】

濁った景色の中で何かが動いていた。
どうして視界が濁っているのか、動いているそれが何なのか判らない。

気泡がぶくぶくと出ていた。

それを見て、夢の中の将也は（ああ、またあれか）そう思った。
水の中で何かがうごめいて、僅かな泡を出す。それ以外何もない。
水は濁っていて視界が悪い為、はつきりとした物は何も見えず、
ただ自分も水中にいるのだと認識する。

それでも息は苦しくない。

不思議な浮遊感に身体は包まれて、重力を感じない。
やがて景色は水面に変わる。

自分が水から上がったというよりも、突然目の前が水面に変わるのだ。

そこが河なのか海なのかは判らない。

相変わらず自分の身体には重力を感じない。

もしかしたら今の自分は実体が無いのではないかと思う。何故なら自分の手足が見えないからだ。

視界一杯に広がる水面が見えるだけだ。

視線はなぜか動かせない。

水面に小波さざなみが立って、とても穏やかな情景だ。

しかし、それを見た将也の記憶の奥底は、ピンツと一瞬跳ね上がる。

それが何故なのか彼には判らなかった。

その水面から再び水中に潜るとそこには玲美れみがいた。

濁った水の中でも、彼女の白い肌が光っている。

出窓から月明かりが注いでいた。

その明かりに照らされながら将也は目を開けた。

カーテンを閉め忘れていた為、もちろんレースのカーテンは閉まっているが……明るい満月がベッドを煌々と照らしていたのだ。

将也は眩しかったわけでもないのに、妙にサッパリと目が覚めた。今しがた見た夢は、彼が時折見る不思議な夢だ。

何時からかは判らないが、だいぶ昔から見ている気がする。

未だに意味不明の夢だが、何か心に変化が起きると見るような気もする。かと言って、その前に何時見たのかは覚えていないが……。将也はいつたい今が何時頃なのか検討がつかず、床に置いている目覚し時計を見ようとそれに手を伸ばす為に身体を伸ばして……軽く驚愕した。

……うわっ。

こころの中で悲鳴をあげる。

自分の身体の横にはもう一つ身体があったからだ。

しなやかで、白い。

それが誰なのか、将也は一瞬で思い出した。

……俺、高校生としちゃったのか。

夕食の後片付けは済んでいたが、テーブルには缶ビールが数本とカクテル缶チューハイが一本ある。

カクテルは仕事帰りに買ったスーパーで、玲美が飲んでみたいと言って買ったものだ。

酔った勢い？ 将也は冴え渡る目とは裏腹に靄の掛かったような記憶を辿った。

夢うつつ……玲美の身体は穂のかにリンゴのようなミントのような甘い香りがした。

成り行きはごく自然だった。

しかし高校生を……しかも制服を脱がして抱いてしまうとは……やっぱり自分は酔っていたのか。

いくら恋愛自由の会社でも、出張先で未成年と……これは完全な淫行になる。

それでも将也は安堵の吐息で眠る彼女を揺すり起こす事には気が引けた。

彼が自分の身体を少しずらすと、影が動いて彼女の白い寝顔の頬を月影が照らし出した。

その白い横顔は、やっぱり何処かで見覚えがあった。

しかし、その記憶を辿ろうとしても、頭の中は何かをすり抜けるように何の手ごたえも感じない。

将也は考えるのを直ぐに止めると思わず彼女の頬にキスをして、出窓のカーテンを閉めてから再び眠りに着いた。

目覚まし時計のけたたましい音で目が覚めた。

夜中にあんなにあっさりと目が覚めたのに、肝心の今は目が渋くて開けられない。

部屋の中には朝の陽差がしこたま降り注いで、その眩しさのせいもあるのだろう。将也は薄目を開けてとにかく起き上がって目覚ましを止める。

上半身は裸だった。トランクス一枚履いた状態で部屋の真ん中に立ち竦んでいた。

ベランダへ通じる窓が少しだけ開けられて、網戸を通り抜けた風がレースのカーテンをゆつくりと静かに揺らしていた。

夢現…… まだ半分眠った頭で思考を巡らす。

そうだ、昨日は…… 将也は部屋の中に玲美の気配を探した。

小さな部屋である。

ざっと見れば直ぐに判る事だ。しかしバスにもトイレにも彼女の姿はいない。

……夢だったのか？ 彼はそう思いながら床にペタリと腰掛けるが、湯沸ポットの横には長い黒髪がSの字を描いて落ちていた。将也はそれを拾い上げるとマジマジと見つめる。

確かに彼女はここへ来た。

そして……

彼はベッドを振り返った。

シワの入ったシーツの上にも、長い黒髪が落ちている。

それは朝の陽差を浴びて、一筋の光を放っていた。

将也はそれ以外にも部屋の中に彼女のいた形跡を探す。

玲美と過ごした記憶が、それだけ半信半疑だったのだ。

記憶の中で夢と現実が交錯する。そんな目覚めの朝は初めてだった。

再びキッチンをよく見ると、洗いざらしの鍋が置いてあった。シンクの下戸棚にはフライパンも入っている。

それらは確かに昨夜玲美と一緒にスーパーで買ったものだ。

……やっぱり彼女がここに来たのは間違いない。そして酒を飲んで高校生の彼女と身体を交えてしまった。

その記憶は朧気にしか無いものの、彼女の白く冷たい肌が彼の脳裏に蘇った。

……学校があるから、朝早く帰ったのだろう。しかしこんなに朝早く？

いや、きつと仕度もあるし親が心配するといけないから、一度家に帰ったのだ。そうに違いない。

そう思いながら将也は電子レンジの上に視線を止めた。

紅いバンダナに包まれた四角い包み。

それが弁当だと直ぐに判った。

彼女はここで今日の分の弁当を作っていたのだ。

玲美がどうしてそんなに自分になつき、これほど尽くしてくれるのかは判らないが、独り身の将也にとってはありがたいことだ。

ただ、彼女の事は同僚には知られないようにしようと思った。

相手が未成年であるが為の危機感みたいなものは、どうしても拭えなかった。

そうしている内に時計は七時になろうとしていた為、彼は急いで

シャワーを浴びてアパートを出た。

その時、クローゼットの中で微かに何かの気配がした事に、彼はまったく気づく事は無かった。

6ノ夜【透ける】

梅雨らしからぬ晴天が連日続いていた。

シヨッピングモール館内のエアコンは急ピッチで備え付けが完了し、配管が剥きだしとは言え、きちんと可動していた。

ただ、全館にいきわたっているわけではなく、いやエアコン自体は全館備え付けが完了しているものの、それらを全て可動させる事は禁じられているのだ。

もちろん工事費予算の関係だろう。

その為、メイン作業場以外はエアコンが作動しておらず、蒸し風呂のような状態になる。

そんな作業箇所があちこちにあった。

外は陽差が降り注いでいるものの、周辺に残る水田の風が流れ込むのか、心地よい風が吹いて何時も清々しかった。

下手に事務所で扇風機にあたるよりずっとましなのだ。

東北の夏は都心に比べれば天国だった。

明日から七月だと言うのに、異常な湿度もなく、夜は未だにエアコンは要らない。

将也はその日の仕事を終えて業務日誌を書き終えると、不意に玲美の事を思いだした。

今朝まで、いや昨日の夜ずっと一緒にいたのに、もう会いたくなかった。

優しい笑みを浮かべる涼しげな玲美の瞳は、遠い単身の地で将也にささやかな安らぎを与えてくれた。

それは、彼が今まで知り合った女性たちとはやはり何処か違っていた。

関東の娘は気さくで明るい女性が多い。

打ち解けるのも早い。飽きられるのも早い。もちろん、飽きられるのは将也の方だ。

玲美は涼しげな眼差しとは裏腹に、何処か暖かさがある。

一緒にいると静かな安らぎを感じるのだ。

「将也、今日みんなで呑みに行くけどどう？」

ロッカーから荷物を取り出しながら信二が言った。

彼も他で班長をしている身だが、信二の場合、夕方の小休憩の時に日誌をほとんど書いてしまう。

何かあれば付け加えるようだが、帰りがけはほとんど提出するだけになっているのだ。

「ああ、少しなら付き合っぜ」

断るわけにもいかなかった。

週末はみんな、飲み屋かカラオケに行く事が多い。

それ以外にたいした娯楽もない。

少し離れた街には繁華街があつて風俗もあるが、わざわざそこまで遠征するのはよほどの好きモノ連中だけだ。

そんな週末の憩いを断れば、何かあるのではと勘ぐられるような気がした。

本当はそんな事はないのだろうが、玲美との事は出来るだけ伏せておきたい気持ちが強かった。

将也は鞆を持つと、事務所の片隅でタバコを吸っていた信二に声をかけて一緒に外へ出た。

* * *

日曜の昼ごろ、将也は小学校へ来ていた。自分が四年生まで通った学校だ。

彼がいた時は濃い灰色の、いかにも古びれた二階建ての鉄筋コンクリート校舎で、あちこちにひび割れが出来ていた。

しかし現在の建て替えられた校舎は、真っ白な4階建てになって

いた。

校庭に足を踏み入れても、そこは確かに自分が走り回った場所の
はずなのに懐かしさは込み上げて来なかった。

校庭と校舎の間には赤松の木が何本か植えられて職員室の窓を隠
していた。

校庭のふちに沿う形で鉄棒やうんていが並んでいる。

一番低い鉄棒はもはや将也の腰ほどの高さしかなかった。

閑散とした校庭の真ん中を歩いて校舎に近づいた。ひと気のない
真新しい建物が彼を見下ろしているだけで、将也の思い出はそこ
には無かった。

校庭の周辺を見渡して景色を再確認するが、四方共に記憶の中の
景色とは違っていた。

上空には晴れ渡る青空が続いている。

それだけは、何時か見たものと同じ気がした。

「アパートは向こうだな」

呟きながら校庭の東側を見つめた。

見知らぬ家並みが続いている。

「やっぱり俺の住んでいた方角だ」

将也はそう言いながら、一八〇度向きを変えると、プールの向こ
うの墓地に視線を移した。

この学校プールの横には古い墓地が在るのだ。

「さすがに墓地は動かせなかったんだな」

そろそろ帰ろうと校門を振り向いた時、そこに人影が見えた。

白いブラウスに紺色のスカート。

それが玲美だと言う事は直ぐに判った。

彼は校門に近づきながら片手を上げると微笑んで見せた。

一昨日の記憶が蘇えって、年甲斐も無く思わずはにかんだ。

「よくここが判ったね」

「うん。今、たまたま通りかかったの」

玲美はそう言って微笑んだ。

陽差を浴びて、顔の白さが際立っていた。

「制服で何処かへ？」

「部活の帰りよ」

部活という言葉は、妙に懐かしい響きだった。

「でも、歩いて？」

自転車は何処にも見当たらない。

「家の遠い友達が自転車壊れちゃって、貸してあげたの」

「そう」

将也はそう言って一息間を置くと「乗ってく？ 送るよ。暇だから」

「じゃあ、何処か遊びに行きたい」

「いいけど、制服のまま？」

「ダメ？ 援交みたい？」

彼女は目を細めて笑う。

「いや、別にいいけど」

そう言って将也も笑いながら、彼女を車に促した。

車の中は地獄のように暑くなっていて、エンジンをかけた将也は急いでエアコンのクーラーを最強にした。

「熱いなあ」

そう言って玲美を見た時、将也は思わず瞬きを繰り返した。

暑さに目を閉じた玲美の身体が、ほんの一瞬透けて見えたのだ。

洋服が透けて見えたわけではない。身体の全てが透き通って、助手席のドアやシート地が見えた気がしたのだ。

しかし彼が数回目の瞬きをした時に、それは収まっていた。

少し顎を上げて瞼を閉じた玲美は、将也の視線に気付いたのか

「なに？」

そう言って、目を開けて振り返った。

「い、いや。何処行きたい？」

遠くから、汐風の香りがした。

7ノ夜【消えた人形】

国道をしばらく走って、産業道路に出た。

三車線の広い道路が続いていた。

周囲は工場や運送会社の大きな倉庫が立ち並んで交通量は少なく、前後に離れて何台かの車が走っているだけだった。

対向車も時折すれ違う程度だ。

大きな材木置き場を過ぎてT字路の先には海が見えた。

そこを左折して海岸沿いを走る。

「へえ、海が意外と近いんだな。気付かなかった」

「それでも、自転車じゃあなかなか来れないから」

玲美は助手席の窓を全快にして吹き込む風を頬に当て、気持ちよさそうに目を細めた。

風を受けた長い黒髪がうねるようにはためいた。

その光景に一瞬将也の鼓動は跳ね上がった。

長い黒髪が大きくうねる光景を見て、夢の中の少女を思い出したのだ。しかし、ここ数日彼はあの悪夢を見ていない。

生活環境に慣れたせいだろうと思っていた。やっぱり不慣れな場所での生活がなんらかの影響を及ぼして奇妙な夢を見させていたのだと思った。

それでも将也は、運転する視線の合間をぬって、何度も玲美^{れみ}を盗み見た。

動きを止めている彼女の姿は、まるで人形のようなだった。

そのまま二度と動かないのでは……そんな錯覚さえ沸き起こるが、瞬きする様を見てホッとする。

「あ、そこ右に曲がって。駐車場があるわ」

彼女にそう言われて、将也は慌てて、それでも急にならないように車を減速させると、彼女の言うとおりに駐車場へ車を入れた。

駐車場は意外と広く、家族連れっぽい車が数台停まっていた。

駐車場から直ぐの堤防を上ると直ぐに砂浜が広がって、周辺には家族連れや犬を散歩させる姿がちらほら見えた。

遠くの防波堤には釣り人の姿も見える。

湿った風を浴びて、玲美の黒髪は踊るようにはためいていた。

飼い主とボール遊びをしていた犬が、ちょうど砂浜から上がって来る所だった。

温和そうなラブラドルが玲美の近くに來た時、彼女を見上げて急に唸りを上げた。

「こら！」

飼い主の女性が慌ててそれを制するが、ラブラドルは身体の重心を後ろに集めて、足を踏ん張りながら鋭い牙を露に唸り続けた。

犬の行動に戸惑っている飼い主を見て将也は

「行こう」

そう言つて、自分達がその場から離れるように玲美を促した。

「あんな大人しそうなのに」

少し離れてから将也が言った。

「あたし、犬とは愛称が悪いみたいなの」

玲美はそう言つて長い髪をかき上げた。

そんな人もいるだろうと将也は気にも留めなかった。

一度後を振り返えると、玲美が遠ざかった為か、さっきの犬は大人しく飼い主と共に駐車場に降り立っていた。

二人は防波堤まで歩いて、再び駐車場へ戻った。

テトラポットに当たって碎けた波が思いの外高く上がって風に煽られるながら堤防に降り注ぐ為、長居は出来なかった。

帰りの砂浜で将也は何気なく足元に目を止めた。

何か不自然さを感じたのだ。

強い陽差できれいとは言いがたい砂浜には、自分の濃い影が落ちていた。

しかし隣にいる玲美の足元には何も無い。それはあまりにも不自然なのだ。

将也は思わず玲美の顔に視線を移した。

……影が無いぞ…… ということだ？

「れ、玲美？」

「ん？」

遠くの水平線を見つめていた彼女が振り返った。

確かに彼女はこの場所に実在している。

将也は彼女が自分の声に反応して振り返っただけで安心した。

自分の隣にいる彼女がただの妄想ではないかと一瞬思ってしまったからだ。だから影が無いのかと思ったのだ。

しかし、再び将也が玲美の足元を見ると、確かに黒い影が落ちていた。

「どうしたの？」

はためく髪を手で制するようにして、玲美は将也を見つめた。

「いや、ああ……お腹空かない？」

「うん。空いた」

彼女の笑顔に将也は、さっきのはきつと見間違いなのだと思った。それ以外考えようが無かったから。

しばらく晴れ間が続き、連日の暑さの中将也も少々ばて気味だったが、ほとんど毎晩玲美が食事を作りに来てくれる為、家に帰ると心の安らぎがあった。

こんな出張なら何時まででもいたっていい。

正直そんな気持ちになるほど、玲美という時間は心身ともに心地

よいものだった。

遠い昔から知っている誰かの温もりに似ている。

その日は梅雨明け以来久しぶりにまとまった雨が、乾いた大地を潤していた。

将也は何時ものように仕事にでて、昼には玲美の弁当を食べる。

彼女は自宅ですれを作ってくる事もあれば、将也の部屋で作る事もある。

もちろん、彼の部屋で弁当を作る前夜は、将也のベッドで玲美は眠る。

「おう、将也。この書類もう一部必要になってさ、コンビニか何処かでコピーとって来てくれ」

雨の為プレハブの事務所で弁当を食べていた将也に声をかけたのは現場主任の出雲元治いずももとはる。

同年代の間ではガンさんと呼ばれているが、もちろん部下である将也たちはそんな呼び方はしない。

「コピーですか？ 及川とかじゃダメですか？」

「きちんととれるか、なんだか心配だよ」

出雲は苦笑しながらお茶を啜った。

新人の及川は自分では仕事が出来ると思い込んでいるが、実は何もかもが雑で、結局後処理を周りの人間がやらねばなくなるような、いわゆる曲者だった。

「判りましたよ」

将也はそう言って、出雲から茶封筒を受け取った。

彼は弁当を食べ終わると、大通りを挟んだ場所にあるコンビニへ向った。

みんながよく弁当を買ったりしている場所だ。

将也がコンビニのドアを開けると、レジのところに深い紫色の袈裟を纏った男の姿が目に見え込んだ。

禿げてはないが、短く丸めた頭はお坊さんだと直ぐに判った。

コンビニ内に坊さんのいる風景は、妙にしっくり来ないものだ

思いながら、彼はコピー機に小銭を入れた。

一枚一枚位置を確認しながらコピーをとり始めると、コンビ二のオーナーらしき年配者と和尚の会話が入って来た。

「人形が？」

「そうなんだよね。一体見当たらないんだ」

「供養を引き受けた人形がですか？」

「ああ、それはいわば無縁仏。持ち主の判らぬ人形たちの中にあつたんだが、けっこう年数が経っていてね。十年以上経ったものは別の棚に並べてるんだ。それが先週急に姿を消してね」

「何処かに落ちてるんじゃないですか？」

「私もそう思つて探したよ。手前の下の方に置いてあつたから、前日は確かにそこに在つたんだ」

「じゃあ、盗まれたんですかね」

「それならまだいいんだけどね……」

コンビ二オーナーは訝しげに和尚の顔を見て

「どういう事です？」

「最近は無いが、昔は捨てられた人形が持ち主の所へ帰ろうと行方をくらます事もしばしばあつたらしい」

「人形が持ち主を探しに出かけるんですか？」

コンビ二オーナーは思わず失笑した。

和尚も穏やかに笑つたが、瞳は笑っていなかった。

8ノ夜【触れ合う記憶】

「人形が持ち主を探しに行くだって？」

将也はコンビニを出て傘をさしてから、再び店内を振り返った。

和尚はさっき店を出て行き、コンビニオーナーらしき男は淡々と仕事をこなしていた。

歩道の先を見ると、さっき出て行った和尚が路地に入る所だった。将也は店内に引き返すと

「すみません。さっきの和尚さんは、何処の？」

別にたいした意味は無かった。話のタネにちよつと興味を引かれただけだった。

「ああ、この裏の通りを少し行つた住宅街の先にお寺があつてね」

男はそう言つてから少し笑つて

「変わり者の和尚でね、人形供養なんかもやってるんだ」

「人形の供養なんて意味あるんですか？」

「意味ある人にとっては、あるんだろ。ほら、人形には魂が宿ると言われるし、それを信じている人もいるから」

将也は引き返しついでに缶コーヒーをひとつ買つて店を出た。

止め処なく降る雨は強まるわけではなかったが、弱まる気配もなかった。

「こんなに頻繁にここに来て、ご両親は心配しないのかい？」

将也は相変わらず小さな台所に立つ玲美^{れみ}に向つて言った。

「うちは共働きだから、あたしには完全放任主義なの」

「へえ」

将也はそう言つて冷えた麦茶を口にする。

「家は何処に？」

「えっ？」

玲美は包丁を持つ手を止めて振り返った。

将也は少しだけ疑問に思っていた。

彼女は決して家まで送らせない。

確かに将也のアパートからは歩いて直ぐの場所らしいが、玲美の家が何処に在るのか、その正確な場所を将也は知らないままなのだ。

「すぐそこよ」

玲美はそう言って再びまな板の上にあるキャベツに視線を向けた。

「そこって？」

「そこって言ったら、すぐそこ」

彼女はキャベツを切る手を止めずに声だけを返した。

「ふうん」

将也はそう答ながらテレビに視線を移した。

東京ならこんな事もあるだろう。

しかし、ここは世間の狭い地方の小さな町だ。

高校生の彼女がここに出入りし続けていいものだろうか……将也の中では小さな葛藤が沸き起こっていた。

彼女は学校が試験休みに入ると毎日ここへやって来て、将也が仕事に行った後も部屋の掃除をしたりして過ごしている。

日中には部活に行っていると言うが、夜は再びここへ来て夕飯を作ってくれる。

そして、三日にいったんは泊まってゆく。

確かに退屈な長期出張にはありがたい彼女の存在だが、この先の事を考えると暗たんとした思いがこみ上げるのだ。

高校生の彼女を浦安に連れて帰れるわけも無く、出張が終われば玲美との終わりもやってくるという事だ。

彼女はそれが判っているのだろうか。

もちろん、出張の予定は十一月までだからまだまだ先だが、確実

に終わりはくるのだ。
ジュワツという、とんかつを揚げる音がキッチンから聞こえてきた。

その夜、久しぶりにあの夢を見た。

黒髪少女が出てくるあの夢だ。

相変わらず白く抜けた顔の中に存在する目鼻ははっきりとせず、
臃気に彼を見つめる。

目の輪郭も白目と黒目もはっきりしないのに、何故か自分を見つ
めている事はわかる。

それが何故なのかは判らないが、少女は確かに将也を真っ直ぐに
見つめていた。

しかし、今回はあのセリフがない。

「あたしを捨てた」という恨めしいセリフがなかった。

ただ一心に将也を見つめる目が、背景の無い世界で臃気に輝いて
いた。

穏やかな風に揺らめく長い黒髪も、激しく舞ったりはしない。

肩から背後に流れた髪は、サラサラと彼女の身体の陰から見え隠
れしていた。

「キミは誰だ？ 誰かを探しているのか？」

将也は思わず自分から問いかけた。

しかし、少女は何も応えなかった。

ただ静かに将也に近づいてくると、唇を重ねた。

将也は動けないまま、彼女に唇を塞がれた。

その距離でも少女の目鼻は臃気なままで、その輪郭、特徴ははっ
きりしない。

ただ、重ねた唇の感触は何処かで確かに感じた覚えのあるものだ

った。

それも、そう遠くない記憶だと思った。

将也は突然目を見開いた。

そこにはほの暗い天井が在るだけだった。

カーテンの隙間から、朝ぼらけの光が薄っすらと入り込んでいる。以前の時みたいに飛び起きるような夢ではなかったが、何故か全身は汗で濡れていた。

将也は今感じた夢の少女の唇の感触を思い出そうとしたが、どうしても思い出せなかった。

9ノ夜【ふたり】（前書き）

これはドロドロした恐怖だけの、あからさまなホラーではありません。
ん。

どちらかと言えば、ロマンティックホラー？　かもしれません。

普通のジャンルと同じように、緩い気持ちで読んでいただければ幸いです。

9ノ夜【ふたり】

その週の土曜日、将也が仕事に向う為に家を出ると、駐車場の前で玲美と会った。

「よかった、今から？」

「ああ」

「これ、今日のお弁当ね」

玲美はそう言って、バンダナの包みを差し出した。

将也は少し照れながらそれを受け取った。

どうして今更照れるのかと言うと、玲美の隣にはもう一人少女がいたからだ。

この状況を客観的に見られるのは、やはり何処か恥ずかしさを感じる。

それは歳の差だったり、単に弁当を作ってもらうという行為だったり。

「ああ、サンキュウ」

将也はそう言いながらはにかむと、玲美の横に視線を移した。

「彼女は友達ゆきのの雪乃ちゃん」

玲美に紹介された雪乃は

「はじめまして」

そう言って、白い歯を見せて笑った。

玲美とは正反対の、耳がようやく隠れるほどの短い髪が印象的だった。

しかも、雪乃という名の割には肌はほんのり小麦色で、寧ろ玲美の方がその名にあっている印象だ。

「同じ学校の？」

玲美と雪乃は同じ制服を着ていた為、当たり前的事だったが将也は思わず確認した。

「ええ、部活も一緒なんです」

「部活は何を？」

将也の問いかけに、雪乃は玲美を見た。

「吹奏楽部よ。言ってなかったっけ？」

玲美が応えた。

「あれ？ 前に聞いたっけか？」

「もう」

玲美は少し頬つぺたを膨らまして笑った。

友達と一緒に彼女はまさしく無邪気な女子学生そのものだった。

「仕事でしょ？」

「あ、そうだ」

将也は玲美に促されて、駐車場に入って車に乗り込んだ。

玲美は彼に手を振り、雪乃は小さな会釈をして二人は自転車であつていった。

これから部活なのか、今が帰りなのか訊かなかったが、去った方角からするとこれから部活なのだろうと思った。

と言う事は、雪乃という娘は玲美の家から来たのか？

それが、将也には何となく安心する要因になった。

何処に住んでいるかはつきりしない玲美だが、友達が迎えに来ているという事は、この近所に確かに住んでいるのだろう。

そう思えたからだ。

しかし昼休み、信二に付き合つてコンビニに向つた将也はふと気付いた事があつた。

この大通りの歩道はけっこうな数の高校生が通る。

試験休みに入ってからはその量は減つたが、それでもやっぱり部活などがあるのだろう、時折集団が自転車を通り過ぎる。

紺色のズボン、女子は同じ色のスカートに白いブラウス。そしてワインレッドのネクタイをしていた。

もうひとつは女子高だろうか、グレーのチェック地のプリーツカートに水色のブラウスを着ている。

その他にも時々、極たまに見かけるグレーのスカートに白いブラウスの生徒もいる。

が、玲美と同じ制服をいっこうに見かけないのだ。

紺色のプリーツスカートに白いブラウスでリボンもネクタイもない学生は、彼女、いや玲美と雪乃以外には未だに見覚えが無い。

将也は思わず歩道を通り過ぎる学生たちを目で追った。

「おい、何だよ。お前は何時も女子高生が一緒だろ」

信二は冗談まじりでそう言っただけで将也の背中を叩いた。

「いや、彼女何処の学校なんだろ……」

「はあ？」

「学校だよ。玲美の制服は他に見かけないんだ」

「ふうん」

信二はそう言っただけで、将也の視線の先にある通り過ぎた学生の背中を見つめると

「そういえば、あの娘が着てるようなシンプルな制服は今時少ないよな」

信二は将也の隣に住んでいるので、玲美が将也の部屋に出入りしている事を知っている。

もしかしたら、夜に体を交わす声が僅かにでも聞こえる事があるかもしれない。

もちろん、将也はそれ自体に気を使っているつもりだが。

そして、とりあえず信二はそれを誰にも話していない。

他の同僚も、玲美の姿を見かけているとは思いが、将也の部屋に出入りしている事までは知らないのだ。

「どっか、離れた学校なんじゃないの？」

「自転車でか？」

「駅まで自転車かも」

「でも、前に学校の友達に自転車を貸したからって、歩いて帰って来てたぞ」

「じゃあ、方向が逆の学校なんだろ」

信二はそう言つて、先にコンビニへ入つて行つた。
充分にありえる事だから、その時は将也も納得してそれ以上深くは考えなかった。

夕方に図面のコピーをとり、再び最寄のコンビニへ行つた将也は、オーナーらしき店員の男を再び見かけた。

「あの和尚も最近ボケてきたのかね。人形がまたいなくなつたつて言つてたよ」

「人形つて、あの供養を請け負っている人形ですか？」

「この前も一体いなくなつたつて言つてさ」

店員の男は、パートの主婦らしき女性店員と弁当の入れ替えをしながらそんな会話をしていた。

「前にも無くしたんですか？」

「和尚は勝手にいなくなつたつて言つてるけどね、何処かに置き忘れたんだろ。そしたら、今朝また一体なくなつてたつて。さっき来た時ばやいてたよ」

「やばいですね、あの和尚も。何か、ある意味怖いですよ」

「そうだよな。自分で他の場所に置いたくせに、人形が勝手に歩いて移動する。とか言いそうだもんな」

男はそう言いながら、お客の手前声を押し殺して笑つた。

女性店員も同じく、声を潜めて肩を震わせていた。

10ノ夜【疑問】

「おかしい……こんな事はわしがここを継いでから初めての事だ」
青雲寺の和尚は境内に隣接した蔵で、ただ首を傾げていた。

境内の奥には人形を供養する為の棚が設けられている。しかしそこは小さな場所で、古い物は蔵の奥へ入れられる。

持ち主から直接依頼を受けた物は供養の後保管されて一年に一度火葬されるが、持ち主不明のものは別の棚に半永久的に保管されている。

蔵の奥にはその為の大きな棚が設けれて、一年以上経っているもの、五年以上経っているもの、そして十年以上……それぞれに分かれて置かれていた。

人形にも個別に札が着けられて、何年に持ち込まれたものかが記されている。

先代の父の前、祖父がここで和尚をやっていた頃は、よく供養中の人形が無くなったそうだ。

持ち主を恋しがり蔵からすすり泣く声が聞こえたりもしたと、和尚は小さい頃祖父に聞いたことがある。

現和尚は人形がすすり泣いたり、勝手にいなくなったりなどするはずが無いと思っていた。

もちろん、供養については真剣に行つて来たが……

しかし、二週間前に突然一体の人形が消えた。

真っ白な肌に長い黒髪をした純日本的な容姿をしているが、洋風造りの古い人形だった。

それがある日突然無くなっていた。

蔵の扉は鍵を掛けているので誰かが持つていく事もないし、犬猫が入れる隙間もない。

そして昨日、二体目がなくなった。

それは境内の影に設けた比較的新しい人形を供養して祭っておく

棚からだった。

有名玩具メーカーが造った黒いショートヘアのその人形はそう古いものではないが、結婚する女性が捨てるのも忍びないと今年の春に持ち込んだものだ。

消えた二体には全く関連性も無く、和尚は首を傾げるばかりだった。

「よからぬ事が起きなければよいが……」

* * *

将也がアパートに帰ると、玲美^{れみ}が来ていた。
もちろん彼女は合鍵を持つている。

日中に洗濯をしたのだろう、乾いた洗濯物をたたむ彼女の姿と、陽差を浴びた洗濯洗剤の香りが部屋の中にあつた。

「お帰りなさい」

そう言つて微笑む彼女の姿は最近珍しくない。

将也が帰宅した後に来る場合もあるが、先に彼女が部屋にいる事も少なくは無いのだ。

とにかく夕方五時から七時頃は同僚の出入りがあるから気をつけてくれと、玲美には頼んである。

だから彼女はその前かその後にくるのだ。

将也と入れ替わるように玲美がキッチンへ行く。

彼女は学校が休みに入っても制服姿が多い。

それは部活がある為だと思っていた。

時折私服姿を見るが、白いブラウスにベージュか紺色のスカートであまり見栄えはかわらない。

「なあ、玲美」

「なに？」

「玲美の高校って何処にあるの？」

「なんで？」

彼女はクリームシチューの鍋を温めながら、それをお玉でかき混ぜていた。

「いや……何処の学校に通ってるのかと思って」

「最近質問ばかりなのね」

彼女は将也を振り返らずに言った。

「いや、でもキミの事を俺は知らなすぎるよ」

「そんなこと無いじゃん。あたしの全てを知ってるくせに」

そう言っただけで振り返った玲美は、目を細めて笑った。

将也は、何故かそれ以上訊く事ができなかった。

翌日は仕事が休みだった為、玲美^{れみ}は将也の部屋に泊まった。

土曜日の夜は深夜からかなりの時間を使って二人は体を交わす。唇を重ねた瞬間、その感触を何処かで感じた記憶が蘇^{よみがえ}った。

もちろん、彼女とは今まで何度もキスを交わしているがそんな記憶ではない。

何か別の場所で感じた同じ感触。将也はそう思った。

しかしどうしてもそれを思い出せない。

そんな思考は直ぐに打ち消されるほど、玲美の身体は将也を魅了した。

朝起きると玲美の姿は無かった。よくある事だ。

どれだけ濃密に身体を交わした後でも、それが幻^{ゆめ}だったのではないかと思わせるほど、彼女は翌朝忽然と姿を消している事がある。

しかし、シワの多いシャツや枕元に落ちた長い髪の毛を見て、将也はホッと息をつくのだ。

玲美との触れあいは夢や幻ではないと認識するのだ。

思考が微かに混乱してしまうほど彼女は謎めいて、透き通るような白い肌は幻想的だ。

あんなに全身が白い女性を将也は見た事が無い。

例えばかなり白い肌の持ち主でも、脇の下や太ももの付け根など常に影になる部分は少しでもメラニン色素が蓄積する。だから僅かに肌は黒ずんでいるのだ。

それなのに、玲美はまるで作り物の身体のようにどの部分も均一に白いのだ。

その白さは肌色と言うには白すぎる。

アイボリーホワイト、または生成と言った方が相応しいだろう。将也はふと昨晚の記憶を蘇えらせて自分の唇を指先で触れた。

……あの感触は……何処で感じたんだ。

彼は、玲美とのキスの感触が何処かで味わったものだと思い出していた。しかしそれが何処でなのか、やはり思い出せなかった。

その後将也はシャワーを浴びる為にクローゼットを開けて手前の棚からタオルを取り出した。

閉めたクローゼットの奥では何かが動く音がしたが、浴室へ向う彼の耳には届かなかった。

11ノ夜【家並】

部屋のチャイムが鳴った。

将也は玄関へ出てドアに付いているマジックアイを覗く。

自分で鍵を開けて入って来ないのだから玲美^{れみ}ではないと判っていた。

フィッシュアイで歪んだ信二の顔が直ぐ傍に見えた。

「ビデオ屋行こうぜ。俺、返す物あるんだ」

ドアを開けた将也に彼が言った。

今時レンタルするのはDVDなのに、言い易さで未だにビデオ屋と言ってしまう。

これが大手チェーン店なら店名で言うのだが、そのチェーン店は大いぶ離れた場所にある為、ここの住人は近くに在る小さな看板のいかにも個人店らしいレンタルショップを利用している。

将也は肩をすくめると

「ちよつと待ってるよ。今着替えるから」

「何だよ、早朝までヤツテたのか？」

信二はそう言って笑った。

「そんなヤルかよ」

玄関でタバコに火をつける信二に向かって、将也はジーンズを履きながら応えた。

「ずいぶん早い時間に彼女出て行ったな」

信二の言葉に将也はベルトを締める手を止めて

「お前、彼女が何時頃帰ったか知ってるのか？」

「ああ、ちようど便所に起きて、そんな時にここのドアが閉まる音がしたよ」

信二はタバコの煙を吐きながら

「あれ、お前じゃないだろ」

「何時ごろだった？」

「何時って…… 6 時頃か」

信二は再び口から煙を吐き出すと

「なんだよ。お前、知らないうちに彼女帰ったのか？」

「ああ、けっこう多いんだ」

将也はそう言いながら玄関まで来て、靴を履いた。

レンタル屋は小学校の方角に在った。将也の車でそこへ向っていた。

「なんだ彼女、ヤツタら帰っちまうのか。普通逆だろ」

車の窓を開けながら、信二が再びタバコを咥えた。

「彼女、謎が多いんだよなあ」

将也は運転する視線のまま呟くように言った。

「なんだよ、学校の事気にしてんのか？ 直接訊けばいいじゃん」

「訊いてみたんだよ」

「何処の学校だって？」

「はぐらかされた」

「はあ？」

信二はシートから身体を浮かす勢いで声を上げた。

「何でそんな事はぐらかすんだ？」

「俺が知るか」

将也は相変わらず、運転する視線を動かさなかった。

小学校を過ぎて交差点を右に入ると通りの左側にレンタル屋があった。

どう見ても、元はコンビニだったという建物だった。

将也も何度か来ているが、玲美が部屋に来るようになってからはめっきり足を運んでいない。

そして、その先には大きなお寺の黒い瓦が、民家の屋根越しに見えていた。

駐車場に車を入れた将也は

「あそこのお寺かあ」

「なんだよ。お寺って」

車を降りた信二が言った。

「ほらあそこの」

そう言つて将也はゆびを指した。

レンタル店に来るのは何時も夜だった事もあり、彼自身氣にとめた事はなかった。

「何？　もしかして前に言つてた人形供養のお寺か？」

「ああ、たぶんな。あそこの寺だ」

「そう言えば、及川も近所の飲み屋で聞いたつて言つてたよ。この辺りじゃあ有名らしいぞ」

「へえ」

「お前が住んでた頃は無かつたのか？」

「さあ、どうだったかな」

そう返した将也はふと氣が付いた。

あそこのお寺の和尚が大通りのコンビニに出入りしているという事は、この通りから仕事場には近い？　この道を使えば通勤にも近いのでは？

と思つたのだ。

「なあ、この場所つて、大通りに近いのか？」

信二に尋ねる。

彼は何時も社用のバンで通勤しているが、やっぱり将也と同じ道を使っているのだ。

「ああ、この裏の住宅街を抜けると直ぐなんだけど」

そこまで聞いて、将也は「じゃあどうしてみんなこの道を使わないのか」と訊こうとした。

しかし、信二の話は続いていた。

「でもさ、一方通行が多くて、車じゃあ向こうへ抜けられないんだ。車で抜けられる道は、だいぶ先だぜ」

なるほど、だから和尚は歩いてあのコンビニまで来るが、だれもそこを抜けて仕事場へ行かないのだ。

「この辺だけ古い区画のままらしい」

信二はそう付け加えた。

「古い区画？」

将也はそう言って周りを見渡す。

そうか、あのお寺は小学校のプール脇の墓地の先に小さく見えていたものだ。おそらく大きく立て替えたのだろう。

学校のこちら側はあまり記憶に薄いし、このビデオショップがある事と、どうやらお寺も建て替えたらしいのを除けば、なるほど何となく家並みに見覚えがある。

……確か、阿部博子という当時学年一押しの美少女が、この辺りに住んでいたと記憶している。

家突き止める為に、放課後にこっそり友達数人と尾行した事があるのだ、

将也がそんな考えを巡らしているうちに、信二はさっさとレンタルショップに入って行った。

将也はそれに気付くと、自分も足早に店の自動ドアを潜った。

12ノ夜【夢の中】

その夜、将也は夢を見た。

あの少女の夢ではなかった。

その中で自分は人形を握り締めている。

全長25センチほどのそれは、長い黒髪のきれいな、真っ白な肌の人形だった。

塩化ビニールというよりは、プラスチックのようなカタイ素材で出来ていた。

黒い瞳に長い睫毛は、西洋造りの為か多少日本人離れているが、明らかに日本の少女を現した物だ。

白いブラウスに紺色のスカートは制服ではないが、清楚感をも出し出す為のアイテムなのだろう。

将也は自分がどうしてそんな人形を持っているのか不思議だった。二十五歳にもなって、いや歳は関係ないとしても今の自分に人形を集める趣味は無い。

しかし、自分の手を見てさらに疑問が沸いた。

その自分の手が、妙に小さい。

これは……俺の手じゃない。いや、俺の手なのは確かだが、今現在の自分ではないと思った。

その考えにリンクするように、夢の中で昔の記憶が蘇った。

将也は小学校の頃、確かに黒髪のきれいな人形を持っていた。

その頃の将也は何故かぬいぐるみなどが好きだったが、別に少女趣味な訳ではなかった。

たまに見かける白バイをカッコイイと思ったし、テレビで人気のロボットアニメも欠かさず観ていた。

彼は動物が好きで、その流れて毛に覆われたぬいぐるみが好きだったのだ。

しかし、人型の人形はそれしか持っていなかった。

昔から女兒むけの着せ替え人形はあるが、モデルが子供なのに目鼻立ちが妙に外人っぽくて気味が悪いと思っていた。

逆に純日本人をモデルにした人形と言えば、伝統的日本人形だが、それはそれで余計に気味が悪い。

だから将也は人型の人形にはあまり興味を示さなかった。

しかしその人形は、ちょうどアニメに出てくる日本の美少女のようで、日本人形のようにおかつぱ頭でもなく、ソフトビニールできた着せ替え人形のように仰々しい顔つきでもない。

体は少し硬い素材で出来ており、腕と足の付け根の間接だけが僅かに動いた。その反面長い髪の毛は風に靡くほど柔らかかった。

少し大きめの黒い眼差しは、何処か涼しげに彼を見つめ、その表情がやたらと将也の心を掴んだのだ。

ただ、どうやってそれを手に入れたのか記憶が無い。

買って貰ったわけではないから、誰かに貰ったのだろうか、何時、誰に貰ったかまでは思い出せなかった。

おそらく小学校の時には既に、その記憶を無くしていた気がする。そして小学校四年生にもなれば、そんな人形には目もくれないだろう。

そんな頃に転校が決まり、引越しの準備をしていた将也は、本棚の一番上に置いたままになっていたそれを久しぶりに手に取った。

貰った時の喜びなどは忘れていたが、しばらくの間自分が大切にしていた事は覚えている。

将也はどうしようか迷っていた。

いらないものは極力処分するように、母親に言われていたからだ。自分が大切にしていた人形なのは充分判っている。しかし、この先この人形が自分にとって必要かと聞かれたら、それはNOだった。人形やぬいぐるみよりも、その頃の将也にとってはF 1マシンの方がよほど興味があった。

彼は引越し当日まで悩んだが、けっきょく捨てるに捨てられず、しかし引越し先に持って行く気にもなれずに、庭のかた隅に隠すよ

うにそれを置いてきた。

その後この地を訪れていない将也には、その人形がどうなったかはまったく知る由も無い。

しかしその時、手に持つている人形の瞳が動いた。

長い睫毛に縁取られた楕円形の目の中にある大きめの瞳は、黒々と虹彩を輝かせて確かに将也を見つめた。

そして、小さな唇が突然動いた。

「どうしてあたしを捨てたの？」

将也は思わす人形を放り投げるように手から離れた。

二度三度小さくバウンドして地面に転がったその人形は、半分うつ伏せのように斜め下を向いていたが、黒い瞳ははつきりと横を向いて将也を見つめ続けた。

乱れた黒髪が頬を半分隠していた。

「どうして捨てたの？」

再び、小さな唇は動いた。

黒髪で隠れた頬が動き、髪の毛の隙間から動く唇が確かに見えたのだ。

目を見開いた時、ほの暗い天井だけが見えた。

将也は声も出さずに、いや息を詰まらせるようにして目を覚ました。

仰向けに天井を見上げたまま、肩で息をしていた。

静寂が時を止めたかのように、自分を呑み込んでいる。

あの人形の顔が脳裏に焼きついていて。

今まで忘れていた顔を、今鮮明に思い出していた。

透き通るような白い肌に少し睫毛の長い目の輪郭。

その中で輝いていた吸い込まれそうな黒い瞳。

そして輝き放つ長くて柔らかな黒髪。

それは誰かに似ていた。

その誰かの顔は直ぐに浮かぶ。

さつきまでこの部屋にいて一緒に夕食をとったのだから。

そして入浴の後二人は身体を交え、彼女は遅い時間に帰って行った。

将也はその二つの記憶を照らし合わせる事が怖かった。

しかし、同時にこうも考えられる。

彼が玲美^{れみ}の事を想うあまり、過去の記憶と混合して彼女の顔が人形の顔として夢に現れた。

だいたいここしばらくは若い女性と言えば玲美としか接触していないのだから、夢の中の女性、いや女性の姿の人形の顔が玲美に似ていてもおかしくないのではないか。

それが、人の心理というものではないのか。

将也は無理やりそう自分に言い聞かせる事で、夢の中の人形が玲美に酷似している事に納得していた。

13ノ夜【届け物】

昔持っていた人形と玲美^{れみ}の顔が似ているのは、潜在意識のいたずらだ。

そう考える事にした将也だったが、それとは別に確かめたい事はあった。

朝早く仕事場へ行った彼は、事務所にある地域地図を広げた。

市内に高校は三つ。隣接する町を含めると7つ存在したが、とても自転車で行ける距離ではない。

自転車で行けるとなるとやはり地元の三校だった。

将也がよく見かける二校は確かにこの現場からほど近い場所にある。

そしてもう一校は国道を渡った先に在るらしい。

玲美が通っている高校はそこだろうか……。

将也は未明に見た夢以来、彼女が何処の学校に通っているのか、無性に気になりだした。

玲美の学校と自宅が確認できれば、どんなに彼女の姿が人形に似ていようが全く気にしなくて済む。

……人形が？

そもそもそんなはずある訳無いではないか。

自分が捨ててしまった人形にたいする罪悪感が知らぬ間に蘇えり、謎めいた玲美と掛け合わされているのだと、将也は思った。

仕事が始まって将也の頭は玲美の学校の事でイッパイだった。

何故彼女は自分の事をあまり話さないのだろうか。確かに何か訳ありっぽい事は覗える。

何か家庭問題を抱えて家にはあまり帰りたくないのかもしれない。しかし、通っている学校も教えないと言うのはどういう事か？

「中村さん」

後輩に声を掛けられて我に帰る。

「何だ？」

「この上の配線はどっちの柱を這わせますか？」

まだパネルの張られていない天井部分に身体の半分を突っ込んだ状態で及川辰彦が言った。

「ああ、それは手前より奥の柱を使え。その方がスイッチのパネルに近い」

「判りました」

及川はそう言って一端脚立を下りると、場所を異動して再び高い脚立に足を掛けた。

将也は気を取り直すと、テナント部分の壁面にスイッチのパネルを取り付け始めた。

昼近く、将也の携帯電話が鳴った。

敷地内にある事務所からだった。

「はい」

「おお、中村か。お前に来客だぞ」

出雲主任の声だった。

「来客？」

「お前、出張先なんだからたいがいにしとけよ」

主任はフツと笑い声を上げて

「とにかく一端降りて来い」

そう言って電話は切れた。

……こんな所に来客？ そう思った瞬間嫌な予感が頭を過った。

エレベーターで一階まで降りて、敷地に出るとプレハブ小屋の前に白いブラウスに紺色のスカート姿が見えた。

やっぱり……

今朝、将也は何時もより三十分早く家を出た。もちろん、事務所

で地図を見るためだ。

そして、何時もと違う時間に家を出た為、玲美とは会っていない。だから、今日は彼女の弁当を貰っていないのだ。

将也の姿を確認した玲美は、遠くから手を振った。

何だか足が重い……将也は彼女に近づくにしたがいそう感じた

「やあ、どうしたの？」

「お弁当」

玲美は笑顔でそう言うのと、何時ものようにバンダナで包まれたものを差し出した。

「わざわざ届けてくれなくてもよかったのに」

「ダメよ。あなたの為に作ったんだから」

将也は弁当を受け取ると

「学校は？」

「自習だったから抜け出して来た」

「歩いて？」

将也は玲美の周辺に自転車らしきものが無いのを既に確認していた。

「いいじゃない、そんな事どうでも」

彼女はただ笑ってそう応えると

「じゃあ、お仕事頑張ってるね」

そう言って敷地を歩いて行った。

将也は、彼女が途中で消えてしまうのでは無いかと後姿をじっと目で追った。

「よう、中村」

プレハブ事務所の窓から出雲主任が顔をだした。

「お前、高校生相手にしてんのか？」

やけにニヤついた表情を将也に向けていた。

「違いますよ。彼女は近くに住んでる親戚の娘です」

「ああ、そう言えばお前、昔この辺に住んでたって言ってたもんな」

「ええ、親戚がまだ近くにいます」

「へえ、しかし出張先で手作り弁当とは羨ましいな」

主任は笑いながらタバコの煙を空に向けて大きく吐き出した。

「じゃあ俺、仕事に戻りますんで」

あまり彼女の事を詮索されないうちに、将也はそう言って彼に背を向けた。

とっさに出た嘘だったが、昔この辺に住んでいた事を知っている主任はそれを真に受けてくれたようだった。

歩きながらふと敷地の遠くへ視線を向けたが、玲美の姿はもう何処にも無い。

彼女が歩いて行った方角は大通りが通っているが、その歩道にも彼女の影は無かった。

たった一、二分主任と話している間に、彼女は何処かへ消えていた。

そう、歩き去ったのではない。消えたのだ。

将也は手に持った弁当を見つめた。

14ノ夜【懐かしい声】（前書き）

14ノ夜【懐かしい声】

将也はその日の仕事を終えた帰り道、大通りから繋がる国道を何時もと反対方向へ曲がった。

しばらく行つた道を左へ入ると、小さな住宅街があつた。その中を抜けるように車を走らせると、直ぐに白い校舎が見える。

「あれだな」

将也は呟くと同時に、腑に落ちない気持ちだつた。

先ほどから何度か見かける女子高生はやはりあの学校の生徒だろ
う。

将也のアパート近辺から自転車で通える距離にある、残りの一校。その制服は、玲美^{れみ}のものとは異なっていた、

将也は学校の正門近くに車を止めて様子を覗つた。

この学校に部活の練習試合が何かで来た他校の制服かもしれない。そう思つたからだ。

しかし正門から出てくる生徒の姿は一緒だつた。

三角形の大きな衿をした変則的なセーラーのようなブラウスに緑色のショートなネクタイを着けている。

スカートは紺と緑色の混ざつたタータンチェックだつた。

玲美のシンプルな制服とは全然違つている。

…… いったい玲美は何処の誰なんだ。 いったい何処の高校に通つ
ている？

将也は内心、そんな考えは無意味なのではないかと思ひ始めてい
た。

夕方の湿つた風とは関係なく、彼の背中には汗が伝つていた。

アパートへ帰ると自分の部屋に明かりが点いていた。

玲美が来ているという事だ。

将也は車に積んであつた小さなMAGライトを手にとって車を降りると、アパートへは向わずに少し先の路地へ歩き出した。

……玲美が車の音で、自分の帰宅に気付いたかもしれない。まあいい。適当に何か言い訳を考えておこう。

将也は、アパートの自室の明かりを見上げながら、路地の曲がり角へ急いだ。

路地を曲がると普通の民家が立ち並んでいた。

何の変哲も無い、二階建ての民家だ。

玲美はいつもここを曲がってこの路地に入る。それからどうするのだろう。

アパートの裏手と言っていた事を将也は思い出していた。すでに将也のアパートの背面にある通路が見えていた。

……この辺も裏手になるのだろうか。

そんな事を思いながら、将也は再び路地を左に曲がった。

もう民家の影でアパートは完全に見えなくなっていたが、これで完全に一本裏の通りに出た事になる。

少し小さめの水銀灯が暮色の家並みを薄っすらと照らしていた。

そこで、将也は重大な事を思い出す。

玲美の苗字はなんだ？ この通りにもし玲美の家があつて、表札が出ていたとしても彼女の苗字を知らなければ探しようが無いではないか。

そう思いながらも将也は路地を前に進んだ。

持って来たMAGライトはまだスイッチをいれていない。

それでも充分に見える明るさはあつた。

庭のガレージに玲美の自転車をさがす。ありふれた仕様のあの自転車が、彼女の家を示すとはとうてい思えなかったが……。

向こうの通りへ出るまでのちょうど真ん中辺りに来て将也は足を止めた。

家と家の間に少しの隙間というか、空間を見つけたのだ。

何かが在るが、街路灯の僅かな光がちょうど手前の電柱に遮られ

てよく見えなかった。

陽は沈みきつて、暗闇が視界を妨げる。

最初はゴミの集積所かとも思ったが、そうではないらしい。

将也はMAGライトの電源を入れた。地面を照らす白い光の帯をその先に向って動かす。

光の中に何かが浮かんた。

「これは……」

お稲荷さんを祀る古い祠ほじりが紅い小さな社やしろに囲われるように存在していた。

囲った社に見覚えは無かったが、その中の祠は将也の記憶を遠く幼い日々へ連れ出した。

……
……

「たま姉ちゃん、これ何？」

「それは、お父さんがオーストラリアのお土産に買ってきてくれたものよ」

「ふうん」

「マー君、気に入った？」

「うん。かわいいね」

「じゃあ、マー君にあげる」

「ほんとう？」

「うん。その代わり、ずっと大切にしてくね」

「うん。ずっと大切にするよ」

……
……

近所に住んでいた年上の娘は確かたま美と言った。

幼かった将也にはどんな字を書くのか解らない。

彼がまだ小学生に入る前からよく遊んでくれた彼女は三歳年上で、彼の家の裏側数件後ろに住んでいた。

彼女の父親がオーストラリアで買ってきたと言う黒髪の人形は、幼い将也の目をクギ付けにした。

たま美は惜しげもなくそれを将也にくれた。ずっと大切にすると
いう約束と共に。

それがあの人形だ。

たま美……苗字は思い出せない。

そして、どんな顔をしていたかも……。

彼女は今どうしているのだろう。

将也が小学校に入って直ぐの頃は、まだ一緒に遊んでいた。そして、いつの間にか顔を会わせなくなった。

それが何時ごろ、どうしてなのかは判らない。

いくら記憶の奥を探っても、黒い闇が取り巻いてそこには辿り着けなかった。

辿り着けないという事は、僅かながらでも記憶の何処かに彼女が自分の前からいなくなった理由を知っているような気がしてならなかった。

しかし、どうしてもそこには辿り着けない。

何かが邪魔をして、その記憶を閉ざし、辿り着く事を拒んでいた。このお稻荷さんは、昔将也が住んでいた家の一本裏手の通りに在ったものだ。

そしてその横の家にたま美は住んでいた。

将也は二階建ての家屋を見上げた。

記憶に全く無いその家は、たま美の住んでいた家ではないだろう。しかし、将也は辺りを見回した。

「ここは……」

当時の家は残っていないし、この通りももっと狭くて車が一台ようやく通れる広さしかなかった。

おそらく区画整理の際に拡張したのだろう。

そして、住宅もほぼ全て建て替えられたのだ。

しかし、お稲荷さんはそのまま残したのだろう。古い土地の区画整理ではよくあることだ。

だからここは……。

「ここは俺が住んでいた場所だったんだ」

将也はそう呟きながら振り返って家並みの向こうを見つめた。

お稲荷さんの場所を基点に、当時の位置関係が鮮明に蘇った。

「あのアパートだ。ちょうどあそこに俺の家は在ったんだ」

将也は走り出すと先の路地を曲がってアパートの前に戻った。

アパートは少なくとも普通の家二件分の敷地があるので、おそらくは隣の家だった場所も含まれているだろうが、そこはまさしく彼が小学校四年の時まで過ごした場所だった。

駐車場の場所には何が在った？ 将也は記憶を巡らせた。

空き地だ。

家の前はただの空き地で低い雑木で囲われて、時々工事用のブルドーザーなど、重機が置いてあった。

将也は思わずアパートの敷地の隅々をMAGライトで照らしていた。

その昔、隠すように置いていった人形。

あの人形が無いか探していたのだ。

土地も建物も全く変わってしまったこの場所に、ましてや一五年の歳月が流れたと言うのに、そんなものが同じ場所に残っているわけは無かった。

「もう無いのよ。マー君」

将也は後から声が聞こえて、慌てて振り返った。

14ノ夜【懐かしい声】（後書き）

淀んだ記憶と共に、黒色の秘密が蘇える……。
声の主は…

玲美は誰なのか……。

お読み頂き有難う御座います。

少しずつ話しは展開してゆきます。

15ノ夜【水面】

「もうそこにはあの人形はないわ」

そこに立っていたのは玲美^{れみ}だった。

アパートの階段を下りた場所で、小さな常夜灯に照らされながら、そよぐ風に黒髪を揺らしていた。

いや、実際は風など吹いてはいなかった。

「キミは、たま美姉ちゃんなのか？」

将也はそう言っただけ、それを自分で否定した。

「いや、そんなわけがない。彼女は俺より三歳年上だった。いま高校生のわけがないんだ」

将也は自分でも気付かないうちに、後ろへ少しずつ下がっていた。

「キミは誰なんだ。どうして俺をそんなふうに呼ぶんだ」

「あたしよ、マー君」

玲美は静かに笑った。

「違う。違う」

将也はぶるぶると首を横に振る。

「あなたがあたしを捨てたからよ」

「何を言ってるんだ。俺が捨てたのは人形だ」

そう言った将也は自分の言葉に背筋が凍りついた。

「お前は、やっぱりあの人形だったのか？」

そんなバカな事があるかと思いいながらも、つい出た言葉だ。

「あたし、探したのよ。マー君」

「探したって、何を」

「マー君の家よ」

「俺の家？」

「探したわ。人形と一緒に」

「人形はお前だろ」

将也の声は震えていた。

「マー君……」

「その名で俺を呼ぶな」

将也は思わず叫んだ。

闇に閉ざされた記憶が蘇った。

その名で呼ばれたくはない。

太い鎖でがんじ絡めに封印された記憶。

幼かった将也が自己の精神を防衛する為に深く葬り去って鍵をかけ、自分すら辿り着けないように固く閉ざした記憶。

…… 思えば、たま美もまた黒髪の美しい少女だった。

「マー君、危ないよ。ここは入っちゃいけないって書いてあるんだよ」

「だって、ここの方が大つきなザリガニがいるんだよ」
小学校二年になった将也は、たま美と一緒に大きな堀の岸边にいた。

その堀は水田に水を引く水路に繋がる為、何時も水位があって危険な場所として指定された区域で、両脇は金網で囲われて立ち入り禁止になっていた。

しかし、こういう場所は誰かが必ず忍び入る。

その誰かの開けた金網の小さな穴は、子供たちの冒険心をくすぐるのだ。

夏休みのある日、学校の友達の家遊びに行った帰り、たま美はその堀にいる人影が将也だと知って声をかけたのだ。

黄昏の迫る田んぼ周辺の草むらから、カエルの鳴き声が聞こえていた。

彼はいつこうにそこから出る気が無いので、仕方無しにたま美も金網の小さな穴を潜った所だった。

「ここは水が深いから危ないんだよ」

「大丈夫だよ」

そう言つて将也が覗き込んだ先には、赤々と大きなハサミを振りかざすザリガニがいた。

将也は持つて来た小さな網を静かに水中へ忍ばせた。

それに気付いたザリガニが、水草の茂る泥の中に素早く逃げ込もうとした。

将也はもつと深く網を入れる。その時彼の靴が湿つた土で滑り、体ごと堀の中に転げ落ちた。

「マー君」

飛沫を上げて水の中に投げ出された将也を見たたま美は、声を上げた。

慌てて周囲を見渡すが、夕暮れの中に人影は無かった。

「マー君」

バシャバシャと水を激しく叩いて暴れる将也に向つて、たま美は懸命に手を差し出した。

しかし、その手は全く届かない。

後に掴まる場所もないから、思い切つて身体を伸ばせないのだ。

「マー君」

「たま姉ちゃん……」

小学二年生の将也にはその堀はあまりにも深かった。

水草の生える岸辺は浅いのだが、人工的に削つた水路の中央は急激に深くなっている。

たま美は思い切つて水に飛び込んだ。

泳ぎは決して得意ではなかったが、自分を慕う将也を助けられないわけには行かなかった。

少女の中に眠る確かな母性本能が、そうさせたのかもしれない。

「お姉ちゃん」

「マー君。しっかり」

沈みかける将也をたま美は必死で支えようとした。洋服があつという間に水を吸つて、思いの外身体が重くなる。

浮力に逆らって、身体が沈み込もうとする。

「早くこつちへ。頑張つて上がるのよ」

将也はたま美に押されるようにして必死で堀の岸辺を這い上がった。無我夢中で伸びきった雑草にしがみ付いた。

岸辺の泥が足をすくい、踏ん張る事ができない。

濡れた手がすべり、やっと掴めたかと思うと雑草はブチブチとちぎれて、なかなか前に進めなかった。

何度も草を掴む手は、その葉で切られ赤い血が滲んでいたが、そんな事を氣にとめる余裕は無かった。

後から必死で押し上げる力が加わって、将也は何とか岸に這い上がる事が出来た。

ほとんど力尽きていた。

たくさん水を飲んだ為に気持ちが悪い。

ずぶ濡れの顔を、涙が止め処なく伝う。

手足は岸辺の泥で真っ黒だった。

そして、将也がようやく息を整えて後ろを振り返った時、堀の水面は静かに波打っているだけで、たま美の姿は何処にも無かった。

暮色に染まる小さな雑木林から、ひぐらしの声がけたたましく鳴り響いていた。

16ノ夜【誘い】

将也の頬を涙が伝っていた。

自分では、何時の間にか彼女と遊ばなくなった理由は判らないと思っていた。

彼女が何処かへ引越したか、それとも大きくなった為に小さな自分とは遊ばなくなったのか。そんなふうに勝手に考えていた。

たま美は彼を救う為に全ての力を使い果たして、暮色に染まる褐色の水の中に沈んでいったのだ。

将也はその事を家の人には言わなかった。

彼女の家族は心配して周囲を探し続けたが、当然たま美は見つからなかった。

翌日警察に搜索願が届けられ、その二日後の朝、彼女は立ち入り禁止の立て札のある水路の中から発見された。

そして将也は自分に対する罪悪感を消し去る為に、記憶そのものを封印したのだ。

それは人が生きてゆく為に必要な、防衛本能が生み出す逃避行動だ。

「俺……俺、怖かったんだ。怖くてどうしようも無くて、たま姉ちゃんの事いえなかったんだ」

将也は子供のように泣き叫んだ。

「いいのよ。マー君」

将也は何時の間にか玲美の胸に抱かれていた。

自分から歩み寄って彼女の前で膝を着いた。

玲美も同じく歩み寄っていた。そして、その胸に将也の頭を抱え込む。

「いいのよ」

優しく彼女の声が、将也の頭蓋に響く。

「ボクが家の人に教えていたら、たま姉ちゃんは死ななかった？」

「もう手遅れだったわ。だからマー君のせいなんかじゃないのよ」

玲美は優しい口調で言った。将也は彼女の身体にしがみ付いた。

「大丈夫。大丈夫よ。マー君」

玲美の手が、将也の短い頭髪を撫でた。

「行こう」

彼女は静かに言った。

「行くって……何処に？」

将也は玲美を見上げた。

「あたしと一緒にいいでしょ。一緒に行こう」

玲美が将也の手を掴んだ。

ひんやりと冷たい感触が将也の手に沁み込む。

呆然と彼女を見つめる将也は、人肌とは違う異様な温もりを感じていた。

「ダメだ」

将也は我に帰って彼女の手を振り払うと、その場に立ち上がった。

「俺は行けない」

「どうして？」

今度は玲美が将也を見上げていた。

「俺は死んでない」

「死んでなくても大丈夫よ」

彼女は口角を上げて微笑むと、その言葉に付け加えた。

「大丈夫、これから死ねば」

玲美は、再び将也の手を掴んだ。その力はさっきまでの優しさの欠片もなかった。

「やめろ」

将也はそれを振り払おうとしたが、玲美の力とはとてつもなく強く、ビクともしない。

「あたしと一緒に行こう」

彼女は将也の身体ごとその手をズルズルと引っ張った。

優しい笑みとは裏腹に、その力は暴力的だった。

「違う、お前は人形だろ。お前はたま姉ちゃんじゃない」

「私がたま美よ。人形の魂と融合したのよ」

「融合？」

思わず抵抗する将也の動きが止まる。

「あたしが死んだ時、その魂はマー君にあげた人形に転移したのよ」

「ウソだ」

「ほんとうよ。それなのに、あなたはそれを捨てた」

風にそよいでいた彼女の黒髪が、孔雀の羽のように大きく扇状に広がって逆立った。

将也は彼女の手を振り払おうとしたが、手足に脱力感が広がって何時もと同じ力が出ない。

「やめろ、やめろ、やめろ」将也は何度も叫んだ。

ドンドンドンドンドン、ドンドンドンドンドン！

何かを激しく叩く音が聞こえていた。

ピンポン、ピンポンピンポン！

ドアチャイムの音に混ざって再び何かを激しく叩く音。

ドンドンドン！ ドンドンドン！

不規則な耳鳴りのように、喧騒が頭の中に入り込む。

「おい、将也！ どうした、将也！」

遠くで自分の名を呼ぶ声が聞こえる。

将也は目を見開いた。

真つ暗な世界が飛び込んできた。

何度か瞬きをすると、自分の居場所がようやく浮き上がった。

そこはアパートの自室。

彼は床に仰向けに横たわっていた。

ベランダへ出る大きな窓からは僅かな月明かりが注いでいる。

起き上がって周囲を呆然と見渡す将也だったが、玲美の姿は何処にも無かった。

ドンドンドンッ……再び音がして、それがドアを叩く音だとうやうやく気がついた。

「おい、どうしたんだ。将也！」
玄関の外から信二の声が聞こえていた。

16ノ夜【誘い】（後書き）

お読み頂き有難う御座います。
次回、最終話です。

最終ノ夜【蒼穹】（前書き）

最終話です。

今回は、少し長いのでゆっくり読んでください。

最終ノ夜【蒼穹】

将也は慌てて立ち上がると、玄関のドアを開けた。

「どうした。凄い叫び声が聞こえたぞ」

信二がそう言いながら、部屋の中を覗いて

「誰かいるのか？」

「い、いや。誰もいない。今は……」

「今は？」

将也は信二に言葉も返さずに部屋へ戻って中を見渡した。

「玲美^{れみ}、いるのか？」

将也は部屋の中央で小さく叫んだ。

「おい、どうしたんだよ。将也」

彼の様子を見て、信二が玄関から上がって来た。

「あの人形が何処かにあるのか？」

将也は部屋の中に語りかけた。部屋を見渡しても人形らしきものは無い。

隠せるような収納は一箇所だけ。

将也はクローゼットを勢いよく開けた。

中は真ん中で上下に仕切られて、通常の押入れと同じ造りになっている。下の段にはダンボールに入ったままの着替え。

そして上の段にはハンギングした夏服が掛けてある。

それをかき分けて奥を覗いた。

一番奥の隅に 黒髪の人形が淋しく座っていた。

間違いない……幼い頃にたま美に貰って、引越し当日にここへ置き去りにした人形だった。

将也はそれを手に取ると、後にいる信二に声も掛けずに部屋を飛び出した。

何かなんだか判らない信二は、将也の行動をただ見ているだけだった。

「おい、いったい何なんだ？」

信二の声が背中から聞こえたが、応える余裕が将也には無かった。外へ出ると、駐車場の車に乗り込んであのお寺を目指した。

途中でふと車内の時計を見る。

一時二十分と表示してあるが、この暗さはどう考えても深夜の一時だろう。しかし、将也はそのまま青雲寺に着くと、人形を手に住職をたたき起こした。

「すみません。お願いがあります。すみません」

境内の横にある平屋の自宅のチャイムを何度も鳴らした。

少しすると玄関の明かりが灯り、擦りガラスの向こうに人影が見えた。

「どなたかな、こんな夜分に」

「すみません、夜分遅くに。ただ、無くなった人形とはこれではないかと」

将也は思わずガラス越しに人形をかざした。

直ぐに引き戸が開けられ、そこにはやたらと似合わないパジャマ姿の住職が立っていた。

「無くなったのは、この人形じゃないですか？」

和尚はそれを見てすぐ

「これを何処で？」

「俺の部屋です」

「あなたの部屋に？」

和尚は困惑した表情で将也を見つめると、自分の坊主頭を撫で上げた。

* * *

「なるほど、あなたの所へ行く為にここを抜け出したのでしょうか」

将也に事情を聞いた和尚は、穏やかに頷きながらお茶を差し出した。

彼の話を全く疑う様子は無かった。

「これは何時ごろ、誰がここへ？」

将也は喉がカラカラだった事に気付いて、熱いお茶を啜った。

和尚も目を細めて湯飲みを啜ると

「これは確か……もう十五年くらい前に、土建会社の人を持ち込んだと記憶しています」

人形に張られているはずの、持ち込まれた年月日を記載した紙はもう無くなっていた為、和尚の記憶だけが頼りだった。

「土建会社？」

「区画整理をする業者だと聞きましたね」

「どうして区画整理の業者が？」

「取り壊した家の庭で見つけたらしいです。小奇麗な人形だしと、ここの噂を聞いて持って来たようでした。人形の祟りがあるとイヤダから供養してくれとかも言っていましたね。ヒゲ面の男がそんな事を言ったので、すごく印象に残っています」

人形が小奇麗だったという事は、将也の一家があの家を出て間もなく区画整理が始まったのだろう。

もしかしたら、区画整理での土地買収に乗っかって、自分の家は引越したのかもしれない。その方が家の売買の手間が省ける。

「しかし、人形とその娘さんの両方の念が込められていたとは、もう一度供養しなされた方がよさそうですね」

和尚はそう言って立ち上がると、将也を率いて境内につながる廊下を歩いた。

「魂が融合したってのは、本当なのでしょうか？」

境内へ向う途中、将也はいまひとつ信じ切れない疑問を和尚の背中に投げかけた。

「一つの物体に幾つもの魂が宿る事は、よくあることです」

「よくある？」

「それは互いに拒絶し合う事の方が多いが、この人形は元々の持ち主をすんなりと受け入れたのでしょうか。いや、彼女が入り込んだからこそ、人形の魂が目覚めたのかもしれないね」

和尚はそう言って振り返ると、穏やかに笑った。

境内の奥に在る人形供養の間に入ると、和尚は祭壇に人形を乗せてロウソクに火を燈す。

線香にも火を焚くと、淡い紫色の煙の中でお経を唱え始めた。

将也はしばしの間、読経を聞きながらその光景を後から眺めていた。

燈した香の匂いが辺りに立ち込める中で、玲美^{れみ}の笑顔を、いや、たま美の笑顔を思い出していた。

ぽかぽかした陽射しのように暖かい笑顔が、何度も蘇える。

「応急処置は終わりましたよ。後は夜が明けてからで大丈夫でしょう」

経を唱え終わった和尚は、そう言って微笑んだ。

和尚の微笑を見て、将也も思わずホッと息をつく。

「そう言えば、もう一体人形が無くなったって」

将也は、ふとそんな事を思い出した。

「ああ、それは戻って来ましたよ」

「戻って来た？」

「数日後に、元の場所にいたんです。ほら、ここに」

和尚に指差されてそれを見た将也は思わず驚愕した。

それは女の子向けの洋風の着せ替え人形で、何種類も時代を重ねる事によってコレクターも存在するという名の知れたものだった。

しかし、彼が驚いたのはそんな事ではない。

少し日焼けした肌にショートカットの黒髪。

おそらくこの人形には黒髪は珍しいかもしれない。

それはまさしく、以前将也が見た雪乃という玲美の友達にそっくりだったのだ。

もちろん、あの制服を着ていたわけではないが……。

玲美はここから友達として自分に紹介する娘を持ち出したのだと思った。そして、後でちゃんとここへ返しに来たのだ。

* * *

あれから十日が過ぎた。

あの日の翌日、本格的に人形供養をすると聞いて、将也はそれに立ち会った。

「彼女はあなたにもう一度会いたかったのでしょうか」

「俺にですか？」

「あなたにあげた人形に魂を宿して待ち続けた。いや、本人の言うとおり、彼女は死後すぐにあなたにあげたこの人形に宿っていたのかもしれない。そしてあなたを見守っていたのかもしれませんが」

和尚は穏やかな口調でそう言った。

そうか……だから、彼女は捨てられたと怒っていたんだ。あれは、人形の想いであり、たま美の思いでもあったというわけだ。

「一緒にいるうちに、もつとずっと長くあなたといたくなったのでしょうな」

「ずっと……ですか」

彼の言葉に、和尚は再び笑顔で頷いた。

「彼女を動かしていたのは、怨念などではありません。強い情です」

将也は、読経する和尚の背中越しに祭壇上の「玲美」を見つめ、何時の間にか涙を流していた。

そう、あの人形はたま美の魂と融合した事で生まれた「玲美^{れみ}」なのだ。

もつと近くに、もつと一緒に。

彼女がそう願ったのは確かかもしれない。

夢現^{ゆめうつ}の中で自分と戯れるうちに……。

将也は何故か、彼女に対する恐怖を感じなかった。

それから玲美^{れみ}は姿を見せないし、あの悪夢も見えていない。

ただ不思議なのは、どうして彼女は玲美^{れみ}と名乗ったのだろ。いつたいその名前を何処から取ったのか、将也は何気に疑問を感じていた。

仕事は順調に進んで8月も終わる頃、現在実家の在る茨城から一本の電話が入った。

「ああ、将也。今月の30日……判る？」

母親が言った。

「何？」

「やっぱり覚えてないよね。ほら、昔よく遊んでもらったたま美ちゃんの命日だから。あんたついでだからお墓にお花供えてあげなさい」

将也はたま美の死が何時だったのかまでは思い出せないでいたが、母親からの電話で記憶に眠る最後の一滴を思い出した。

そうだった。

あれは、あと一日で夏休みが終わるという日だった。

たま美の家は、彼女が亡くなってしばらくすると引っ越して行ったらしい。

その後は将也の母親が命日や彼岸に墓参りをしていたが、たま美の両親は見かけた事が無いと言う。

当時ひどくショックを受けた様子の将也には、内緒にしていた事だ。

だから余計にたま美の記憶は将也から遠のいて消え失せたのだろ

う。

将也は母親に言われたとおり、たま美の墓参りに行った。

それは小学校のプールの横に広がる青雲寺の墓地の一角に在った。山ほど菊の花を買って、将也は彼女のお墓にそれを供えた。

あの時彼女が身を呈して救ってくれなければ、自分は今ここですうしてはいなかっただろう。

褐色の水に深く沈んでいたのは、自分だったに違いない。

和尚はこの前の事があるので、特別にお経を上げてくれた。

線香の束から煙る香の香り（こう）が辺りを白く取り巻いて、周囲から降り注ぐセミ時雨に溶けてゆく。

将也は目を閉じて静かに手を併せた。

今自分にできる事は、それくらいしかないのだと思った。

そして彼女の墓石に刻まれた文字を見たこの時、自分の前に現れた少女がナゼ玲美（れみ）と名乗ったのか、その謎がなんとなく解けた気がした。

『竹内玲美享年11歳』
（たけうちたまみ）

……たま美の字は玲美と書くのだ……。

彼は何も意識しないまま、自分の頬を勝手に伝う涙を感じていた。

頬を伝う熱いものが、ぽたりぽたりと重力に引かれて落下する。

空は青く澄んで、少しだけ雲が高くなったようだ。

将也が零した雫は、残暑の陽差に照らされた黒い御影石に幾つかの跡を残したが、それはあつという間に蒸気となって熱い大氣の波間に消えて無くなった。

了

最終ノ夜【蒼穹】（後書き）

最後までお読み頂き、有難う御座います。

ホラーとしては物足りなく感じる方も多いかもしれません。

でも、私はほろ苦いようなホラーが、意外と好きで…。

それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0312f/>

月影のDOLL

2010年10月8日15時52分発行